HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	書評へのリプライ：「東北タイの開発僧：宗教と社会貢献」
Author(s)	櫻井, 義秀
Citation	宗教と社会, 15, 149-152
Issue Date	2009
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/47966
Type	article (author version)
File Information	Thai_shukyo_shakai.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評へのリプライ

櫻井義秀

まず本書を書評対象本に選んでくださった編集委員会の皆様に感謝申し上げたい。評者の綾部真雄氏は北タイ少数民族であるリス族の研究者として知られる文化人類学者だが、筆者の社会学的調査法や分析視角、及び知見を丹念に読み取っていただき、メリハリをきかせた文章で紹介してくださった。さらに、2 つの問題を提示され、筆者がそれに答えることで本書の特徴をさらに敷衍できることになった。著者への配慮が感じられる書評に厚く御礼申し上げる。

社会関係資本への視点

本書の構成は、①開発僧を宗教の社会貢献、社会開発論といった大きな理論的文脈に位置づけ、②タイや上座仏教の初学者にも配慮して東北タイの開発僧を考える地域的・社会史的背景を描きこんだうえで、③先行研究の 44 事例と筆者が調査した東北タイの開発僧の 32 事例、及び一般の僧侶 81 事例の比較研究を配したものである。

メタな理論構築を行う社会学であれば、③の調査を踏まえて①に戻って理論的還元を行うべきではなかったのかというのが評者の意見だった。全くその通りだ。本書脱稿時は学振の出版助成による年度内刊行という条件の下、僧侶 113 名の事例集に正確を期すべくタイ語のローマ字表記をはじめ資料の点検作業に追われて理論的な考察に緩みが出た。

評者に促されたこともあり、理論的寄与は何かを社会関係資本論から考えてみた。

先行研究や本書の事例が示すように、寺院と村落、村人の間にある信頼・互酬性を基盤とした僧侶による社会事業があったことは確かである。僧侶が有する文化資本や社会資本を動員する開発が、地域開発 NGO や行政の開発より有効であった事例もある。ナーン師をはじめとする典型的な開発僧は、商品経済化により信頼・互酬性が低下した村落に瞑想修行やタンブン等の共同行為で社会関係資本を回復し、経済開発の基盤を作ったともいえる。

但し、本書では社会関係資本を十分に説明できていない。すなわち、厳密なネットワーク分析によるのであれば、①僧侶(住職・一般僧侶)→寺委員会(村人)→村・区の委員会/行政、②僧侶→村人→村外で出稼ぎ中、或いは成功した都市在住の村人、③僧侶→村外の篤志家という 3 つのルートに関して、異質性の高い集団をブリッジするパスを具体的に確認してこそ、開発行為における社会関係資本の存在や活用という実質的な議論ができる。この点はエピソード的にはおさえてある。

村外で協力してくれる行政や NGO、或いは他の団体等ありますかという質問から、僧侶のカリスマ性やサンガ内地位に応じて引き出せた社会関係資本（バンコク在住の篤志家の布施や有力寺院の支援等）を示した事例もあるが、総じて僧侶一般が利用可能な社会関係資本（村人からの布施や奉仕）には限界がある。その結果、寺院の社会事業の総量と村落の経済水準がほぼ正の相関を示すことが郡部寺院の悉皆調査から分かった。

しかし、社会関係資本の利用について実証する調査上の工夫が足りず、1 寺院につき 1-2 時間のほぼ 1,2 回限りの調査では限界がある。筆者の事例集積型調査はエスノグラフィーと相互補完的な関係にあると認識している。本書で批判したのは、実証的な事例研究の域を超えた過剰な一般化や、社会関係資本の曖昧な概念や調査方法であって単独の寺院や地域の研究ではない。

包括的な開発僧論の中には社会関係資本を集合財として捉え、宗教的理念や共同行為に裏打ちされた信頼・互酬性規範のあるなしで社会開発（経済開発や市民社会組織の形成等）の進展がうらなえるという魅力的な議論がある。しかし、いざ、実証的な研究を行おうとすると社会関係資本の指標化や測定方法、他の社会構造的要因との関連をモデル化することが非常に難しい。議論を深めるには調査法を含めた理論構築が必要であり、宗教の社会貢献活動を社会関係資本論から見ていく場合の課題となる。

筆者の調査事例の大半は僧侶のイニシアチブが村人の協力行動に先んじていたことが多かったので、僧侶・寺院による社会事業の類型化と、それを可能にした時代・地域文化的背景を可能な限り記述するために社会学的な比較分析の方法を導入したのである。

結果的に、評者がまとめてくれた通りの事例に則した知見を提示することに留まった。

東北タイの僧侶から学んだこと

筆者と研究テーマや調査対象との「距離感」は、対象との関係性の中で意味を読み込む研究者側の主体性・立場性、或いは主客の関係性をトータルに状況や構造との関係で扱う文化人類学の立場からは奇異に思われたかもしれない。もちろん、評者は筆者が価値中立的な社会科学という幻影を追いかけているわけではないことを理解しており、宗教に対するデタッチメントへの志向性にカルト研究を行う研究者ならでは懐疑を感じたという。もちろん、宗教への懐疑ではなく、宗教的理念や善意に魅せられすぎる研究への懐疑だ。

対象と概念に対して距離を維持することはカルト研究とタイ研究から学んだ。概念をめぐる論争の不毛さは編著『カルトとスピリチュアリティー』（ミネルヴァ書房、2009）で述べたところだが、開発僧研究でも同じである。

寺院をめぐり、僧侶に事業内容の説明を受ける調査を繰り返しているうちに、筆者から概念化への欲望が抜けていった。いや、私ごときが各僧侶の事業にこんな意味がある、広い視点から見ればこうも考えられるといった贅言を尽くすことが無意味に思えてきたのだ。

僧侶は具体的にしたこと、しなかったこと、その経緯のみ語り、将来計画への構想は述べてもいわゆる夢は語らなかった。構想を述べることすら躊躇する僧もいた。呪術的霊能を発揮する僧侶はなおのこと、依頼されるままに護呪経を唱え、護符を渡し、息を吹きかけるだけだ。信徒集団を率いるほどのカリスマ僧侶に会わなかったこともあるが、総じて僧侶は行為の人達だった。

筆者は事物・事態に即してありのまま見ること、概念で見ないことに心地よさを感じるようになった。評者の言葉を借りよう。筆者が「タイの仏教のやられた」としたらここで

はないか。おそらく、どんな調査も数例であれば試行錯誤の余地があるが、自分自身で数十例もあたっていけばおさまるところへおさまっていく。そのおさめ方から概念を立ち上げるグランディド・セオリーのような研究手法もあるが、本書のやり方はそれとも異なる。

僧侶達はなすべきことをなしているだけと語った。筆者のなすべき事は僧侶の事跡を簡潔に記述して、東北タイの文化風土、僧侶と寺院の宗教実践を学術的にまとめあげることである。立場も役割も異なる。筆者は僧侶の言説ではなく、姿勢に学んだと述べておこう。もちろん、学んだからといって習慣化される域には至っていないので、冷静さを失いコミットメントしすぎの発言をして大人げないと窘められること多々ありの日常生活である。

調査研究として

本書の長所を一つあげるならば、調査・分析方法、調査資料をきちんと明示して、データの二次分析が可能な形で公刊した点にある。従来の調査研究は、構造理解等の客観主義批判を経て、ギアーツの「厚い記述」にしろ、新宗教研究の「内在的理解」にせよ、調査者の文脈的解釈や調査者―被調査者の共振を過度に重視するか、ポストコロニアル的な語ることの不能を嘆いたり、表象する側の権力性を暴露したりといった議論が多かった。

開発僧に現代資本主義やグローバリズムへの対抗軸としてオルターナティブな開発やローカルな知を見いだそうという志向も理解できないわけではない。僧侶の中には「開発僧」に与えられた一般僧侶との差異（価値）をシンボルとして使用し、ネットワークを形成する動きもある。それでエンパワーメントされる局面に新しい社会運動論にも似た社会形成の兆しをみることもあながち不当とは思わない。しかし、それだけではない。むしろ、筆者の調査事例が示すように、開発に従事する僧侶は大量に　多様に存在している。志向性

そこを見すえることの重要性　　連続性　と不連続性　　どちらも問わなければならない。本書は連続性をまずおさえてみた。

必要なことは、研究者コミュニティや関係者が研究をトレースし、批判の糸口を見いだせるよう資料を整備しておくことではないか。本書は日本語の出版であるが、いずれ時期を見てタイの関係者が閲覧可能な体裁で研究成果を公刊しようと考えている。その時には、評者から指摘のあった点を踏まえて理論的含意にも十分配慮したい。